

幼稚園の家庭教育補導

倉 橋 惣 三

幼稚園の任務が、園内幼児生活の保育に止まるものでなく、その幼児達の家庭教育補導に意を用るなければならぬことは、豫て屢々説き來つたこゝである。しかも、その必要は愈々大なるものがあり、一層力を入れて主張せざるを得ないことを感ずる。

先づ家庭教育の重要性が主問題であるが、それは茲に更めて説くまでもあるまい。たゞ、實際の問題として、社會的施設の發達に伴ひ、その方への力點が強調せられ、強化せられると共に、（それは極めて大切なこゝであるが）人間生活の根本、殊に人間教育の本據たる家庭の充實に對し、それと併行的に力を盡すことが、往々忘られ勝ちになるのである。吾人素より、現代の家庭生活の缺陷を熟知してゐる。そこに子女を托して安心し得ない點の多いのをよく知つてゐる。しかし、それだからといって、その補ひを外で、即ち社會施設で、つけるだけではいふことは決して出來ない。當面の補充として、社會施設に俟つべきと共に、もつと遠い慮り、深い念ひとしては、家庭生活の教育性そのものへの著眼を、絶えず持ちつゞけなければならぬ。それが、さうも、慮りの遠さと、念ひの深さに於て足りなかつたりし易いのである。甚だ卑近の例をひくやうであるが、たゞへば疾患の治療に於て、藥物的方法の必須であるこゝのみを思ひ、その當面的效果のみに力を用る、その人の生活全體に就ての意の用ゐ方が足りないでは、眞にその人を健康にするこゝは出來ない。しかも、そうした當面的方法に偏して、それで事終れりとする場合が、必ずしも稀でないのである。

託児所發達の初期に於て、その施設者の意圖が、往々にして逆用せられ、逆效果を來して、家庭の教育的稀薄を來し、託児所は家庭教育の破壊作用をもつなざゝいふ。こんでもない批難がされたりしたものである。これは施設者の罪か親の

不都合か、そのいづれであるかといふよりも、互の相關現象であつたのであらう。そこで、「託児所は家庭教育補導を、その主眼點の一つに置かなければならぬ」といふ主張が、そうしてその爲の工夫が凝らされるやうになつたのである。しかも、まだ／＼その點に於て不用意なる場合が少なくなく、社會政策の名に於て、家庭を忘れてゐることがある。そこで、「託児所の家庭教育補導の責務」といふことは、最も緊急な警告でなければならない。託児所が對象とする幼児の家庭は、家庭としての教育的充實に於て、恐らく遺憾とする點が顯著なのであるからである。

ところで幼稚園の場合であるが、この點に於て實は何等の變りもない。或る幼稚園の場合に於ては、純社會政策施設としての託児所の場合に比して、その家庭の教育的充實が見られるこゝもある。しかし、その家庭が、教育に対する自己の不足を反省し、その補充を専門施設としての幼稚園に求めてゐるこゝの意識に於ては、極めて熾烈なるものがあるのである。家庭生活が必迫状態に置かれてゐる場合には、親にこうした教育意識を希望するこゝが、それ程充分でない。しかし、社会政策の見方針から、その子を引きつて保育してやらなければならぬ。それに対する、一般幼稚園に於ては、そうしたこちらからの仕かけといふよりも、家庭の切實なる教育意識に對して適應せんとするものだといつてもいい。そこに、その家庭の求むる教育を、外的に引受けただけでなく、内的に補導してゆくこゝが、當然の任務となるのである。我子を幼稚園へ託して、自家の家庭教育を放棄しないまでも肩おろしてゐる如き家庭があつたら、責めべきであり、鞭打すべきでもある。同時に、その論語切實なる教育要求に對しては、出來得る限りの手傳ひを供與し、補導に任すべきである。

三

家庭教育の補導には、素より種々の方法があり、それ／＼の方面から力をつくされなければならない。しかも、幼児を先づ保育することによつて、その家庭の教育を補導する位、適切な方法、又、具體的な方法はない。殊に、一般的に普遍原則を、つまり客觀的に語る科學性の他に、その子を中心にして語る眞情の藉り方は、さんざんにか大きな力をもつものかと思はれる。その人がどんな學者でも、さんざんいゝ話ををして呉れる人でも、我子に就て深い關心を、いつしよの心配をもつてゐて下さる先生にお話していたゞいた方が、ぐつゝ效果の深く又こまやかなものであるこゝは疑ふべくもない。この意味で、幼稚園の保姆先生ほどの、母へ、しみ／＼こした家庭教育補導の出来る人はないといへる。家庭教育の補導は理でなく、論でなく、教へでなく、眞情から眞情への作用が中心となつてゐるものだからである。